

堀辰雄とフランス文学 —プルーストの影響を中心として—

水島裕雅

1 はじめに

堀辰雄（1904-1953）は東京帝国大学文学部国文科を昭和4（1929）年に「芥川龍之介論」を書いて卒業したが、師の芥川同様、外国文学に大きな影響を受けた。とりわけ芥川の自殺（昭和2年7月）以後は自分の文学の手本をフランス文学から見出そうとして積極的にフランス文学と取り組んだ。そうした堀のフランス文学との取り組み方については、堀自身が「フランス文学を如何に観るか」（『作品』昭和5年11月号）で次のように述べている。

永井の云ふやうに、美しいすべてのものは伝統的だ。世間はいつも伝統は古臭い姿をしてゐるものだと考へてゐる。それは大きな誤解だ。伝統はいつも思ひがけないところに、みづみづしい姿をして、生き返つてゐるのだから、用心したまへ。フランスの作家たちは彼らの伝統をたえず若返らせることに努力してゐるやうに見える。それはフランス文学の一特色と見ても差支へない。フランス文学上の革命がいつもよりフランス的になるために起るのではないかといふ蔵原君の意見は正しい。だが、彼らはそれを如何なる方法ですか？僕はさういふ彼らの主要な方法として外国文学の不断の影響を挙げたい。僕は、あんなに古い立派な伝統を誇つてゐるフランスの文壇が外国文学を移植するのに決して吝かでないのに驚かすにはゐられない。アンドレ・ジイドなどは、「最もよいフランス的な頭脳は出来るだけ外国文学の影響を受け入れ、それをよく消化しうる頭脳である」とまで云つてゐる。そして彼自身に最も大きな影響を与へた作家はゲエテとドストエフスキであると付加してゐる。— そのために、僕はフランス文学を学ばば学ぶほど、それを学ぶことの必要を痛感すると同時に、いつか日

本文学の伝統についてもしみじみ考へずにはみられなくなるのだ。¹⁾

堀はフランス文学の特色の一つとして「外国文学の不断の影響」を挙げ、自分自身もフランス文学から積極的に吸収しようとする。それでは彼はフランス文学から主に何を得たのか。また、それをいかに自分自身の問題と結びつけ、また「日本文学の伝統」とつなげようとしたのであろうか。今回は堀がこの時期に積極的に取り入れようとしたプルースト（1871-1922）の影響について考察してみたい。

2 堀辰雄とプルースト

2-1 従来の堀辰雄とプルーストについての考察

従来の堀辰雄とプルーストの関係を考察した論文では、文体の面から論じたものが中心であって、主に堀の『美しい村』との関係を論じてきた。

最近刊行された『堀辰雄事典』（2001年）においても、森脇義明は堀とプルーストの関係を論じた項で次のように述べている。

堀辰雄の「プルースト体験」は『美しい村』の奇跡的な文体によって結晶をみたが、『失われた時を求めて』の「ミニアチュア」だといってもそこには制約がある。『美しい村』の関わるプルーストは、『スワン家のほうへ』と『花咲く乙女たちのかげに』からせいぜい『ゲルマンのほう』の「前期プルースト」（三輪秀彦「堀辰雄とプルースト」）に限るようである。堀の遺した「プルースト・ノオト」では『ソドムとゴモラ』『囚われの女』『消え去ったアルベルチヌ』に読書は進行しているが、『美しい村』では活用された趣はみられない。堀のプルースト読書は終生続けられているが、「プルースト体験」を実作に摂取したのは『美しい村』から『風立ちぬ』の時期までにとどまる。²⁾

こうした論考の流れは、森脇も引用しているように三輪秀彦の「堀辰雄とプルースト」（『堀辰雄全集』第10巻、角川書店、1965）によって作られた。三輪はこの論において、発表されたばかりの堀の「プルースト・ノオト」を検証しながら、

執筆年代未詳のこの「ノオト」を、堀とプルーストとの関係の前期（三輪の分類によれば「昭和3年頃から昭和9年頃まで、つまり堀が『失われた時を求めて』に最初の啓示を受け、それを最も意欲的にかつ意識的に追求した一時期」³⁾とある）と関係付け、その前期におけるプルーストの影響を中心に論じている。そして、この時期における堀は自分とは異質なプルーストとの出会いによって動揺したが、「それは本質的な変容を彼に強いるほど強烈ではなかった。堀は異質なものを受け入れるためにはあまりに自己に忠実でありすぎたのかもしれない」⁴⁾と述べ、堀がプルーストから得たものを、『美しい村』に見られるプルースト的な「息の長い屈曲した文体」⁵⁾としたのである。

しかし、ここでは三輪がこの後に述べた次の言葉に注目したいと思う。

そして堀が正面衝突をうまく避けながら、プルーストという怪物から巧妙に誘い出したのは、『美しい村』から『物語の女』をへて『風立ちぬ』に至る新しい感情流露の形式である。これは堀本来の詩人的な特質を散文の中に生かし得る方法であって、彼のいささか生硬な小説概念とは離れた地点で、見事な結実をもたらした。この地点から、晩年の王朝文学傾倒まではほんのひとまたぎである。⁶⁾

三輪は堀がプルーストから得たものは、「息の長い屈曲した文体」と、「感情流露の形式」であるとしているが、「息の長い屈曲した文体」は『美しい村』以後、あまり見られない。むしろ「感情流露の形式」はさまざまに形を変えながら晩年の作品につながっていると思われる。そして、ここで問題にすべきことは、その「感情流露」がどこに向かっているかであり、形式よりも思想にまで高まっていく内容の問題であると筆者は思うので、今回は堀がプルーストから得たとされる思想、あるいは文学的テーマについて考察してみよう。

2-2 堀辰雄とプルースト—死者たちの記憶の芸術作品化をめぐる—

堀辰雄がプルーストに出会ったのはいつごろであろうか。

昭和3（1928）年8月3日の神西清宛書簡では「ソレカラ PROUST ヲ早く君ノ物ニセヨ（中略）君ガ寧ロ PROUST ト心中スルコトヲ」⁷⁾と書いている。日

本でのプルーストへの関心が高まったのが1928年ごろであった⁸⁾とするならば、これは堀がその時代の文学的先頭を行っていたことを意味するであろう。しかし、この時点では堀はプルーストを読んでいなかったのも、プルースト研究では一歩先んじていた親友の神西にプルーストを究めるよう勧めたのであろう。そして1年後の昭和4年8月15日には、同じく神西に宛てて次のように書き送っている。

今年大学を出た奴が四人がかりでプルーストの「スワン」を訳して持ってきた なかなかいい訳だ (中略)「文学」でプルーストを本格的に紹介したいと思ふ故、いろいろ君に忠告して貰ひたいと思ふ、それから小説を書いた後で、(とにかく一つ書きたまへ) 誰かのいいプルースト論を紹介してくれるやうに頼む。⁹⁾

堀はそのころ自分が中心になって月刊文芸雑誌を編集しようとしていた。その結果発行されたのが『文学』(昭和4年10月—5年3月、全6冊)である。この『文学』の第1号から第4号までは淀野隆三訳(第2号からは神田龍雄、三宅徹三、佐藤正彰、淀野隆三共訳となっている)でプルーストの『失われた時を求めて』の最初の「スワン家の方」が掲載されている。

神西は堀の求めに応じて『文学』第2号(昭和4年11月)に「プルーストの或る姿態」を載せた。彼はその中でビベスコ夫人の「プルーストとある舞踏会」を引用しながら、プルーストの文学の本質について次のように述べている。

プルーストの芸術が深く響いた魂の宝物が欲しければビベスコ夫人の中に探すのがいい。夫人だけは少くともそれを持ってゐる。ここにプルーストに照応するための彼女の最後の言葉がある。――

「まつたく暗喩的な方法で、それも自分の力の及ぶ限りの内で、自分の愛惜する死者たちの記憶を次次に他の人人に仮托して死滅から救ふことが、あらゆる文学の真の意義でも目的でもあると私は思つてゐます。」¹⁰⁾

神西はこのプルースト論の中で『失われた時を求めて』が死の考察によって

俗悪なセンチメンタリズムから免れていること、芸術作品の使命の一つは死者たちの運命の完成であること、書物は大きな墓地であって真の文学の意義は愛惜する死者たちの記憶を書き留め完全な死滅から救うことにあることなどを指摘した。

堀はそれまでコクトーの「マルセル・ブルーストの声」（堀は昭和4年4月厚生閣から刊行した『コクトーオ抄』にこれを翻訳して掲載している）などのみから想像していたブルーストの作品を、この神西の論を通して、また『失われた時を求めて』の冒頭の部分が邦訳されたことを契機に、原文で読みたいという意欲を起こしたのではないだろうか。しかし、堀はその前にやりかけたことを完成させねばならなかった。その一つは自分を見つめた初期作品の集大成（それは『不器用な天使』として改造社から昭和5年7月に出版された）と、敬愛する師芥川龍之介の死（昭和2年7月）を形象化（それは「聖家族」として『改造』昭和5年11月号に掲載された）して、自己のあり方を確立することであった。しかし、彼は「聖家族」脱稿後多量の咯血をして療養しなければならなくなった。

堀は病気がよくなるらないため、昭和6年4月には富士見高原療養所で養生することになる。その前に彼は神西に宛てた2月23日付けの書簡で「僕はプルウストの「ソドムとゴモル」を読もうつて野望を起こしてゐる」¹¹⁾と述べ、未入手の部分を彼から拝借したいと頼んでいる。また、富士見高原療養所からの4月16日（推定）の葛巻義敏宛葉書では「プルウストの「ゲルマント」を有難う」¹²⁾と述べているので、この富士見高原療養所で養生していた4月から6月にかけて堀はブルーストを読み始めたものと思われる。また、彼はブルーストの『失われた時を求めて』を初めの巻から読み始めたのではなく、むしろ後半の「ソドムとゴモル」から読み出していることにも興味が持たれる。なぜならば、この巻には有名な「心の間歇」という無意志的記憶と心の目覚めを扱った部分が含まれているからである。

堀のちにサミュエル・ベケットの英語版『ブルースト』を読んで「プルウスト覚書（三十歳にならうとしてゐる詩人の手記）」を『新潮』昭和8年5月号に発表した。その中でベケットがまとめた「無意的記憶」（堀はそう訳している）の11例について要約している。ここではその第6の例とされている「心の間歇」についての堀の要約を引用しよう。

第六の経験は「心の間歇」と呼ばれている有名な一節だ。彼はその愛してゐた祖母の死後、母に連れられてバルベックのグランド・ホテルへ二度目に行く。(最初の時はその死んだ祖母と二人きりで行つたのだ)「最初の夜、私は心臓が苦しくてしやうがなかつたので、その苦痛をごまかすために、私は靴をぬがうとして注意深くしづかに屈んだ。しかし、私が私の深靴の最初のボタンに手をふれるや否や、私の胸は見知らない神々しいものでいっぱいになつて膨らんだ。嗚咽が私をゆすぶり、涙が私の目から流れた。」

その瞬間に、数年前の、このホテルへ着いた最初の晩、疲れ切つた彼のために靴をぬがせてくれようとして、その上に身を屈めてゐた祖母のやさしい、気づかはしげな顔が、その腕のなかへ身を投じたいやうな衝動を彼が感じたくらゐ、生き生きと完全に蘇つたのだ。そしてそれと同時に彼は初めてその祖母が死んだといふ事に、死んだのが誰であつたのかといふ事に、気づくのだ。そして彼はその祖母が死んでから一年許りと云ふもの、彼女のことも、彼女に対する自分のこまやかな愛情すらも、すつかり忘却してゐたこと(ブルーストはそれを「心の間歇」と呼んでゐる)を認めて驚く。¹³⁾

長い引用となつたが、このブルーストの「心の間歇」と呼ばれる部分は堀の心をつかみ、その後の彼の創作活動にも大きな影響を与えたものと思われるので、その全文を取り上げることにした。堀はブルーストの『失われた時を求めて』を「ソドムとゴモル」から読み始めて1年半経って、「ブルースト雑記(神西清への手紙)」(『新潮』昭和7年8月号)など三つのブルースト論を神西清に宛てた手紙の形で相次いで発表し、それらをまとめて「マルセル・ブルーストー神西清への手紙」として『文学』昭和7年9月号に発表した。のちにこれは「ブルースト雑記」あるいは「三つの手紙」などと改題されるが、いずれも副題として「神西清君への手紙」または「神西清に」とあり、堀のブルースト論が神西に負っていることを明らかにしている。

このブルースト論はジャック・リヴィエールやシャルル・デュ・ボスを初めとして様々なブルースト論を論じながら、ブルーストの文学創作の秘密を探る

うとするものであるが、その書き出しは「今朝、僕はこんな夢を見た」で始まり、ついでその夢が「妙に悦ばしいやうな感情」を与えていることに気がつき、その理由を次のように考察している。

それは僕の幼児の追憶から生ずる特異な感情にちがひなかつた。といふのは、そんな風にオオケストラ・ボックスの中をのぞきこんであることが、いつもさうしてゐた子供の頃の僕に、その時の僕を立戻らせてしまつてゐたからだつた。そしてそんな僕には、僕の幼時の全体が、——「ジゴマ」だの、「名金」だの、レストランではじめて食べた蝦フライの匂だの、ふだんはどうもよく思ひ出せないである死んだお母さんの声だのが、思ひがけずはつきりと泛んで来てゐたからだつた。……

僕は今朝の夢のおかげで、それらの過去の経験の一切を知らず識らずの裡に再び思ひ出してゐたのだ。それで今朝はこんなに機嫌がよいのだ。¹⁴⁾

堀はその後に「何故こんな夢の話を書いたのか、君には解つてゐるだらう。さう、君の御推察のごとく、たしかにこの夢にはプルウストの影響がある」と続け、プルウスト論に入っていくのであるが、ここで問題としたいのは、堀がまずプルウストに惹かれたのが『失われた時を求めて』のテーマに対してであつて、文体とか形式に対してではないということである。文体については「あのプルウストの難解な文章」とか「リヴィエールもやはり平素音楽的な文体が好きだつたので、プルウストの、「まるで引き伸ばして頁の隅々にピンで留めたやうな文体」には散々悩まされた¹⁵⁾とむしろ否定的に述べているのである。

そして、ここでは「ふだんはどうもよく思ひ出せないである死んだお母さんの声」にとくに注目したい。堀はそれまで書きたくても書けなかつた関東大震災で死んだ母のことが、このプルウスト論とともに初めて書けるようになったのである。

堀は『婦人画報』昭和7年7月号に「美しいと思つた女」の総題のもとに「花を持てる女」という短文を寄せた。これはのちに『四季』第1冊(昭和8年5月)に再録され、さらに『狐の手套』(昭和11年3月)に収められたのち、『幼年時代』(昭和5年12月から17年8月まで各誌に分載、17年8月に青磁社からまとめて刊

行)に収録された。堀の母親をテーマとした作品の原型と言えるのがこの短い「花を持てる女」であるので、ここで少し触れておきたい。

それは堀が子どもの頃家族の写真を見ながら皆の前で得意そうに説明したとき、一人の見知らぬ若い女の写真を手にして当惑したという話から始まる。そこではまず、それが自分の母の若いときの写真だと言われても、太った実際の母と写真の生け花をしている痩せた美しい女性とが一致しないで困ったという子どものころの記憶について語られている。次に、数年後の記憶について語られるが、そこでは母が息子の中学受験の合格祈願に酒と煙草を断って太ってしまったことや、母が生け花を習い始めて、その姿が写真の女を思い出させたこと、しかしまだ心の底では母と写真の女と一緒にしたくない気持ちがあったことが述べられている。それからさらに数年後の関東大震災(大正12年9月、辰雄18歳、母志気50歳)で母は死に、写真もなくなった。その後、母と写真の人がようやく一つに溶け合いだしたと堀は言う。子どものとき、その写真が母と信じられなかったのは、その人があまりに美しすぎたからと、その容姿に妙になまめいた媚態があるのを子ども心に気づいて気恥ずかしかったからではないかと堀は思う。その服装もその頃の芸者の服装だったように思われ、そうしたことから母は父(実際は養父の上条松吉のこと)のところに嫁入る前は芸者をしていたのではないかと一人でひそかに空想していると堀は述べる。

このように、この昭和7年の時点で堀はようやく自分の最愛の母親について回想の形で語り出せるようになった。そこにはブルーストの『失われた時を求めて』を読んだことと、先に引用した神西清のブルースト論が反映していると思われる。つまり、「愛惜する死者たちの記憶」を書きとどめる文学の使命の問題である。

堀は「ブルースト雑記」を書いてから、次々とそれまで書けないでいた関東大震災とそれによる母の死について書き出した。彼は短文「花を持てる女」の2ヶ月後に短編小説「麦藁帽子」を『日本国民』昭和7年9月号に発表した。この小説は「私は十五だつた。お前は十三だつた。」¹⁶⁾で始まる。まず堀自身と思われる15歳の少年「私」の、「お前」と呼ばれる13歳の少女に対する淡い恋愛感情が、海辺を舞台に「私」の視点から描かれている。その一方で、母から独立していく少年と、「私の中に昔の儘の子供らしさ」¹⁷⁾を見つけようとする母との

心理的葛藤が描かれている。その後2年が経って、「私」は文学を志すようになり、「お前」と呼ばれる少女と会う機会も減るが、かつて海辺でかいだ「お前」の麦藁帽子の匂いを思い出させる少女の髪の毛の匂いをすれ違いざまにかいだとき、「私」は息をはずませる。この短編の最後には「地震！ それは愛の秩序をもひつくりかへすと見える」¹⁸⁾で始まるエピローグが付けられている。地震によって家は焼け、両親から離ればなれになって避難していく途中で「私」は「お前」たち一家に出会う。野原で避難者の人々と大きなテントを張って野営をしながら、「私」は余震などで寝付かれぬままに少しうとうとしたあと、「ふと目をさますと、誰だか知らない女の寝みだれた髪の毛が私の頬に触つてゐるのに気がついた。私はゆめうつつにそのうつすらした香りをかいだ。その香りは私の目の前の髪からといふよりも、私の記憶の中からうつすらと浮かんでくるやうに見える。それは匂ひのしないお前の匂ひだ。太陽のにほひだ。麦藁帽子のにほひだ。……私は眠つたふりをして、その髪の毛のなかに私の頬を埋めた。お前はぢつと動かずにゐた。お前も眠つたふりをしてゐたのか？」¹⁹⁾ この短編は父との再会、母の行方不明、「お前」たちとの別れで終わる。

「麦藁帽子」は以上のように匂いを契機とした「無意的記憶」の蘇りを扱う点において明らかにブルーストの影響が見られる。その一方で堀は母の死を扱おうとして、未だその死を描くことができないでいた。それは翌年の昭和8年1月号の『文芸春秋』に発表された「顔」という短編小説の中で再度試みられる。

「顔」は「路易（るい）」という青年を中心にした三人称体の小説である。母親の死は路易の少年時代のエピソードのように軽く触れられる。しかし、ここでは「麦藁帽子」のような「無意的記憶」によってではなく、少年の情欲と母の死とが平行する形で描かれている。路易の相手は地震で避難していく途中で話しかけられた見知らぬ女工であり、二人はテントの下で横になる。路易は眠れぬままに、「自分に体をくつつけて寝たふりをしてゐるその娘に何度も頬ずりをした。」²⁰⁾ 翌日、路易は娘と別れて自分の家の焼け跡に引き返し、そこで父と再会し、夕方母が川の中で溺死体となって発見された。「路易は自分の母の死体を川から引き上げる手つだひをさせられた。その間、路易は何でもないやうな顔をしてゐた。夜、再び天幕の下で眠られぬままに、路易はふと昨夜頬ずりをしてやつた娘のことを思ひ出した。その思ひ出はたいへん苦かつた。」²¹⁾ こ

のように、堀は繰り返し地震による母の死と、主人公の情欲を対比させて描いている。なぜ堀はこのように繰り返し母の死のテーマを描くために主人公の情欲を描かねばならなかったのか。それは堀自身が文学に目覚め、また母親以外の女性に関心を持ち始めて、その恋愛感情を描き出していた時期に関東大震災に遭遇し、母を失ったからではないだろうか。さらに言えば「母を離れた感情の重味」²²⁾に堀自身が気がついていたその時に母を失った罪意識が堀に繰り返しこのテーマを描かせたのではないだろうか。

堀はさらに昭和9年2月号の『文芸』に「挿話」という小品を発表した。この作品はのちに『物語の女』（昭和9年11月）、『風立ちぬ』（昭和12年6月）に収録され、さらに『幼年時代』（昭和17年8月）において「秋」と改題されて「三つの挿話」の中の一編として収められた。この「挿話」は震災で母を失い、父と二人で過ごした東京近郊の村でのいくつかのエピソード（堀は「悲歌（エレジイ）」と呼んでいる）と、その後数年して再訪した時の印象を記したもので成り立っている。堀は初め次のように述べている。「私は私の母を、その地震によつて失つたばかりであつた。それにもかかはらず、私には自分がその事からさほど大きな打撃を受けてゐるとはどうしても信じられなかつたのだ。私自身にもそれが意外な位であつた。」²³⁾しかし、村びとの噂で地震のため気がいになった女の噂を聞き、またその女を実際に見て、「私」は次のように感じる。「そしてそれが私の死んだ母と同じ年輩で、そのせゐか、どこやら私の母と似通つてゐるやうな気もされてくるや否や、急に私の胸ははげしく動悸しだして、どうにもかうにもしやうがなくなつた。私は暫くちつとその場に立ちすくんだきりでゐた。さうして、母の死が私に与へた創傷も殆どもう癒されたやうに思ひ慣れてゐたこんな時分になつて、突然、そんな工合にひよつくり私のうちに蘇つたその苦痛が、今までのよりずつとその輪郭がはつきりしてゐて、そしてその苦痛の度も数層倍烈しいものであることを知つて私は愕いたのであつた。」²⁴⁾

ここにはブルースト体験によって明らかにされた堀の新しい文学のテーマが見られる。それは、それまでのコクトーやアポリネール、あるいはランボーやラディゲなどの文学を吸収した比喩や才知や新しい感覚による新しい表現をめざすものではなく、他者や死者に寄り添い、嘆きを共にし、彼らの運命を完成

させ、死者の記憶を芸術作品として後世に残そうとするものであった。

3 おわりに

このように堀はプルーストの『失われた時を求めて』の読書や、神西清あるいはベケットのプルースト論などを読みながら、自分の問題と重ね合わせてその影響を受け入れ、消化していった。

さらに彼はリルケ体験もまじえて、「伊勢物語など」（『文芸』昭和15年6月号）に見られる「少なくとも、僕は、さういふ古代の素朴な文学を発生せしめ、しかも同時に近代の最も厳粛な文学作品の底にも一條の地下水となつて流れてゐるところの、人々に魂の静安をもたらず、何かレクキエム的な、心にしみ入るやうなものが、一切のよき文学の底には厳としてあるべきだと信じて居ります。」²⁵⁾という、堀自身の文学論に至り、さらに「自分の愛惜する死者たちの記憶」の芸術作品化というプルーストから得た問題を「日本文学の伝統」にまで広げ、「曠野」（『改造』昭和16年12月号）の『今昔物語』の哀れな女の物語の再話にまでいたるのである。こうした堀の「鎮魂歌」としての文学の提唱の根底には彼のプルースト体験があったことを指摘し、堀のプルースト体験は彼の後期作品にまで及んでいたことを述べて、この短い論を終わりとする。

注

堀辰雄の引用は筑摩書房版『堀辰雄全集』全10巻、別巻2（全13冊）、1977-1980を用いた。同全集からの引用は著者名、全集名、出版社名を省き、作品名と巻数ならびに頁数を記した。なお旧字体は新字体に改めたが、旧仮名遣いはそのままにした。

1) 「フランス文学を如何に観るか」、第4巻、pp.174-175.

2) 森脇義明「プルースト」、『堀辰雄事典』、2001、勉誠出版、2001、p.197.

3) 三輪秀彦「堀辰雄とプルースト」、『堀辰雄全集』、角川書店、1965、p.268.

4) 同書、p.272.

5) 同書、p.273.

- 6) 同書, 同頁.
- 7) 「神西清宛書簡」, 第 8 卷, 1978, p.49.
- 8) 三輪秀彦, 前掲書, p.269-270 によれば, プルーストが日本の読者に知られるようになったのは, 彼の死後 1923 年 1 月の N.R.F. 誌に「プルースト追悼号」(『マルセル・プルースト叢書』に再録, 1927 年) によってであろうとされ, 淀野隆三の回想によれば, 1928 年頃には, すでに日本においてプルーストに対する関心はかなり高まっていたとのことである。
- 9) 「神西清宛書簡」, 前掲書, p.60.
- 10) 神西清「プルーストの或る姿態」, 『文学』第 2 号, 1929, p.83.
- 11) 「神西清宛書簡」, 前掲書, p.67.
- 12) 「葛巻義敏宛葉書」, 同書, p.70.
- 13) 「続プルースト雑記」, 第 3 卷, pp.395-396. なお, 「プルースト覚書」はその後諸本に再録されるに際して「続プルースト雑記」「覚書」などと改題された。
- 14) 「プルースト雑記」, 同書, pp.358-359.
- 15) 同書, pp.360-361.
- 16) 「麦藁帽子」, 第 6 卷, p.124.
- 17) 同書, p.135.
- 18) 同書, p.143.
- 19) 同書, p.144.
- 20) 「顔」, 第 1 卷, p.271.
- 21) 同書, p.272.
- 22) 「甘栗」, 第 4 卷, p.381.
- 23) 「秋」, 第 2 卷, pp.178-179.
- 24) 同書, p.180.
- 25) 「伊勢物語など」, 第 3 卷, p.260.